

常盤中だより



学校教育目標

「心豊かな中学生」 「自ら学ぶ中学生」 「活力あふれる中学生」



【仲間のエール】



校長 橋本 栄

今、常盤中の校庭では、必死に歯を食いしばって長距離走に取り組んでいる生徒の姿が見られます。生徒が持っている記録カードには、「『もう駄目だ』と思った時のひと頑張り」などの合言葉が書かれています。本当につらそうですが、毎回目標を定め、実に真剣に走っています。何事も真面目にやり遂げよ

うとする姿には、まさに常盤中の伝統が顕われているようです。特に印象的なのは、友人の温かく力強い声援です。終盤は、疲れ切った走者の近くを伴走しながら、「ガンバガンバ」とエールを送ります。すると足取りがアップします。そしてタイムアップ、「お疲れ」と労い合います。

この光景を見て、私の知人の体験談を思い出しました。30年以上も前のことです。彼は、明るく活動的な少年でした。小学校卒業後、通学に電車で1時間ほどかかる中学校に入学しました。当然、知っている人はいませんでした。

2学期に入ってからのこと、授業中、彼の手元にメモが回ってきました。そこには、彼のなまりをからかう言葉が書かれていました。この行為は、彼が授業で発言した後に必ずありました。彼は次第に人前で話すことをしなくなりました。発言すると周りが笑っているように感じたそうです。この行為はどんどんエスカレートし、授業中だけでなく日常でも冷やかされるようになりました。

彼の住んでいた地域は、話し言葉になまりがありました。なまりはすぐには直せない、だから親や先生に話しても仕方ない、我慢するしかないと考えていたそうです。彼は、初めて担任に「お腹が痛い」とうそをついて早退してしまいました。その後も早退を何回か繰り返したそうです。

さぞかし辛かったろうと思います。私が親だったらどうするだろう、担任だったらどうするだろう、この話を聞いたとき考えさせられました。

彼に対する行為は、あるきっかけでなくなりました。それは、周りから彼が冷やかされているとき、そこにいたクラスの仲間たちが冷やかしている生徒に向かって、「言葉がおかしいと言って笑っている人間は、最低の人間」「相手の気持ちを分かってあげられないのは、最低の人間」と言ってくれたそうです。

学校では、生徒や保護者向けのアンケートなどでいじめ防止に取り組んでいますが、一番は、昔も今も仲間のエールであることに変わりありません。

